

備える 3.11から

第168回 ライフライン寸断

長期避難の心構えは

地震や台風といった大きな災害時には、命が助かっても家屋の倒壊やライフラインの途絶で、日常生活を取り戻すのに日数を要するケースが少なくない。特に南海トラフ巨大地震の危険性を抱える東海地方では、長期間にわたる被害を考えておく必要がある。今回の「備える」は、避難所生活や停電・断水時に必要な対策と心構えを紹介する。

③段ボールのベッド作り

揖斐川・防災キャンプ



避難生活 記者が体験

「南海トラフ 停電1ヶ月あり得る」

A young girl with dark hair, wearing a red short-sleeved shirt with a white floral pattern and blue shorts, stands on a blue mat. The mat is covered with numerous broken eggshells. She is looking down at the shells. In the background, there is a gymnasium setting with other people and equipment.

A group of children are playing in a shallow stream or puddle in a rural area with rice fields and mountains in the background.

千葉県では電力の全面復旧は週間近くを要した。栗田さんは「備えにも限度があり、電気や水を欠けばやがて生きていけなくなれる。いざとなれば、近県の安全地帯に逃げる覚悟も必要でござります」。



村岡治道・岐皇大特任准教授

被災後の生活考え

日向のトコトコで済むかいご飯

防災キャンプでは、東日本大震災の被災地でも活躍した「ロケットストーブ」が食事作りを支えました

ス製の筒を組み合わせて作る。効率が良く、小枝や廃材などを燃料に使えるため、災害時も力を発揮する。大人なら2時間ほどで作れるという。キャンプを運営した「チームおじま」はロケットスタートを地域の祭りで活用している。

り方講座も開くなどして有用性を

広めている。キャンプでは、夕食のミネストローネと寒天ゼリー、朝食の茶わん蒸しをするのに役立つ。十分な火力があり、鍋の湯はぐつぐつと音を立てて沸騰。食材をポリ袋に入れ、鍋の湯で温める簡単な調理法ながら、温かい食事に子どもたちの精神をこころづけさせた。



防災キャンプで食事を作るのに役立ったロケットストーブ